

## 大学生における首尾一貫感覚（SOC）スケールの構造化

サカノ ジュンコ ヤジマ ユウキ  
坂野 純子\* 矢嶋 裕樹<sup>2\*</sup>

**目的** 本研究は、Antonovsky (1987) によって開発された SOC スケール13項目版の構成概念妥当性をその因子構造の観点から検討し、加えて、SOC スケールの下位因子の臨床的有用性を抑うつとの関連性において吟味することを目的とした。

**方法** 分析対象は、都内の A, B 大学および、中国地方の C 大学に在籍する大学生1,110人とした。SOC スケールの構成概念妥当性は探索的因子分析ならびに確認的因子分析を用いて検討した。また、SOC スケールの下位因子と抑うつとの関連性は構造方程式モデリングを用いて検討した。

**結果** 探索的因子分析の結果、2つの解釈可能な因子（「把握処理可能感」「有意味感」）から構成される2因子解が最適な解であると判断された。次いで、確認的因子分析の結果、前述の2因子から構成した SOC スケールの二次因子構造モデルがおおむねデータに適合することが示された ( $\chi^2$  値 = 327.065, df = 64, GFI = 0.957, CFI = 0.872, RMSEA = 0.061)。さらに、構造方程式モデリングの結果、「有意味感」は「把握処理可能感」よりも「抑うつ」に対して高い影響力を有していることが示された。

**結論** Antonovsky の3因子仮説は支持されなかったが、今後、「処理可能感」と「把握可能感」の弁別可能性について、慎重に検討していく必要性があろう。なお、得られた2因子（「有意味感」と「把握処理可能感」）は、「抑うつ」に対してそれぞれ異なる影響力を有しており、これら2因子に着目することによって有益な臨床学的情報が得られる可能性が示唆された。

**Key words** : 大学生, 首尾一貫性感覚, 抑うつ, 確認的因子分析, 構成概念妥当性

---

\* 岡山県立大学保健福祉学部保健福祉学科

<sup>2\*</sup> 岡山大学大学院医歯学総合研究科社会環境生命科学専攻公衆衛生学分野  
連絡先：〒719-1197 岡山県総社市窪木111  
岡山県立大学保健福祉学部保健福祉学科  
坂野純子